

術も射撃も重要だけれど、やはり行軍に強いことが最も重要でした。訓練が辛いというが、「血に代えるに汗を以てする」とか「愛の鞭」ということでしょう。只、感情的な私的制裁は人間的にも許すべきでなく、軍紀を乱すものなので私も軍隊では相当荒いことをやったが、愛情をもってやったつもりです。私は長崎出身で、長崎、福岡、佐賀の戦友や後輩が多いものですから、毎年五月、三県持ち廻りで戦友会を開いている。波八千六百三十二部隊の連中ばかりです。皆、私に来てくれと呼んでくれるし、空港まで迎えにも来てくれて、戦友愛に感謝しています。

南支派遣純兵団の戦闘の裏で

福岡県 田中 稔

私は昭和十七年六月一日教育召集により東京都世田谷区陸軍自動車学校練習隊に入隊しました。入隊前の状況は、新潟県長岡市に在住し召集と同時に本籍福岡県に帰

宅、再度東京へ出発し長い汽車の旅でした。家族では、両親と妹三人弟一人で、長兄は満州へ出兵、次兄は昭和十四年ノモハン事件にて戦死、と云う状況の中で出征しました。

入隊と同時に待っていたのは、軍人勅諭でも内務班のビンタでもない朝から夜まで油と汗にまみれて、自動車の修理、整備です。全然知識がなく本を読んでも、外国語は日本語に変えねばならず、設備は悪くて人力でエンジン等重量物の取り外し、取り付け、危険と一緒に作業をしている状態でありました。六か月間、油の臭う手で箸を持つ、全く辛苦の言葉が其の儘当てはまるものでした。教育終了後、十七年十二月一日、兵技一等兵と同時に引続き召集。久留米第五十一部隊へ転属、五十日余り箒と塵取りを持った掃除兵であった。

昭和十八年一月二十五日、独立混成第二十三旅団司令部へ転属となり、同年兵二人で出発した。途中、博多駅にて母と十三才の弟との別れが、何とも言えぬ別れでした。

一月二十六日門司港発。一月三十日台湾高雄着、二月

が、暗い電気でエンジン取り出し、ライニングの張り替
えと、それは大変な作業でした。幸に何の事故もなく夜
明け近くに終了、行軍となりましたが、今思っても良く
出来たと思います。このことは戦友会の話の種の一つで
す。

この時に、練習隊の教育期間中、未完成の設備でも、
やれば出来るという不屈の根性を植え付けられた賜物と
思いました。斯くして本隊に合流、三亜陸軍飛行場に落
ち着くことが出来ました。

三亜飛行場での話を一つ、兵器班の隊長の言、「純兵
団は、海南島を決戦の地と定めて、嚴重警戒と戦斗態勢
を整えて、怠りないようにせよ」と、参謀よりの達しが
あったとのこと、よって班長以下取組んだ作業が戦国武
将の見事な鎧とまでは言えないが、雑兵の胴着のような
物で真黒なものでした。内容は十五程程に切り、その縁
に孔を明けて一組八枚くらいを結び合わせて、胸に当て
るといふものであった。試しに近距離から短銃で射った
が、弾は通らなかつたという決戦態勢の鎧の話でした。
これに竹槍を持てば、まさしく昔の徒侍と言われたもの

であつたと思われる。まあ、数拾拾も飛ぶ大砲と竹槍と
では戦争は出来ません。

その中で時は移り、二十年五月頃には何処からともな
く米英軍の北上や、独軍の無条件降伏など信じ難い事な
ど耳に入る。

時を同じくして海南島を出て、つぎの作戦へ移る。二
十年五月十日、四か月程住み馴れた榆林のトヨタ自動車
修理工場を出発する。正月に来た道を逆行して海口へと
向かう。

我々は、五指山の東岸を走りに走つたが、戻りは順調
であつた。思い出を残した、雷州半島を北上して、寸金
橋へ五月三十日到着。十日の期間内に総ての整理を終え
て、長々の行軍となる。六月十日遂溪県寸金橋を出発し
一路広東へ広東へと進軍なのか、退却なのか、何ともい
やな毎日毎日の行軍でした。やつとの事で二十年八月十
二日、広東郊外へ到着、武装を解き汗を流したのも束の
間、三日後には敗戦の兵となる。

終戦の日、広東郊外に駐留して居ましたが、現地住民
の態度、行動が変わり大変腹だたしさを感じました。後

刻、終戦の伝達と共に、中国人に対する言動、行動に注意するように訓示あり。もはや何を考え、何をすることもなく、呆然自失の状態となる。二、三日後に広東の中山に移動し、武装解除となり、とうとう軍人の魂を、手放す運命となった。

その後は、河南地区へ移動抑留され、十月より二十一年四月まで、七か月間、捕虜と云う日本人には恥ずべき言葉の下に置かれ、何もかも忘れて、人間の改造に会ったようです。

やがて待望の帰国の日がやって来た。五月初めに、行動を開始し、乗船帰国となる。船の中の人間模様、対人関係等、あさましき部分や、面白い部分等、様々なものを見聞きました。

浦賀の港に着いて、やっと帰って来たと思ふものですが、その後が悪い。検疫の結果、コレラ患者が発生し、船留めとなり、二十日くらい遅れて上陸した。この時、一人の兵隊が、海岸に向かって飛び込んだ事件があった。と聞いて、誰しもさもあらんと思ひながらも、まともの上陸して手続きを終えて帰路に着きました。

博多駅で、福岡市の一望の焼け跡を見た時、ほんとうに戦争とは何であったのか、を感じたものです。博多駅より二時間くらいで、我が家に帰り着く。母の第一声、「おお生きていたか、良く帰って来た」の言葉であった。満四年の勤務中、後半は手紙も着かず、便りもない状態であった、との事でした。

純兵団の後日談、帰還した英霊は、六百一人であったとの事でした。心から冥福を祈ります。兵団標語は「焼くな犯すな穢すな」で、対民衆軍紀は酷しいものであり、それを実行していました。復員後二年間程、マラリア熱が出て、妻を困らせた事もありました。

仏印の明号作戦

石川 岩 木 栄 光

私は現役で昭和十八年四月、金沢の連隊に入営し、約二か月後の六月出帆、仏印のサイゴンに上陸しました。そこから四〜五日かかってフーランチョンにつき、第一